みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology Repository

特別研究「ポストナショナリズム時代の博物館の挑戦」の射程＜特別研究 : ポストナショナリズム時代の博物館の挑戦 : 少数／先住民族の文化をいかに展示するか＞

著者	鈴木 紀
雑誌名	民博通信 Online
巻	171
ページ	12-13
発行年	2003-03-31
URL	http://doi.org/10.15021/00010016

特別研究「ポストナショナリズム時代の博物館の挑戦」の射程

鈴木 紀

国立民族学博物館（民博）は、2022年度より新しい特別研究「ポスト国民国家時代における民族」を開始した。これから5年間、毎年新しい研究が、それぞれ3年計画でスタートする。その先鞭をつけるのが本研究である。

特別研究は現代の主要な社会動向として「ポスト国民国家」を想定している。本研究の目的は、それが博物館の少数／先住民族文化の展示にもたらす課題を明らかにすること、その克服にむかってさまざまな博物館が行なっている試みを共有すること、そして国立民族学博物館の今後の展示指針となる議論を展開することの3点である。以下にその概要を記す。

ポストナショナリズムと博物館

特別研究全体のテーマにあるポスト国民国家という概念を、本研究ではポストナショナリズムと言いかえる。本研究は統治制度としての国民国家よりも、博物館展示が表象する文化の担い手としてのネイション（国民または民族）に関心があるからである。そしてポストナショナリズムを、国家の統治機能への信頼に基づく国民的アイデンティティが相対的に弱まり、人びとの生活において国家横断的な制度や、国家内部の地域的、政治的組織の重要性が増す現象と捉える。国境を越える人と情報の流れが増大するグローバル化と、国内の特定のアイデンティティが強化されるローカル化が相互作用する過程、いわゆるグローカリゼイションが従来の国民国家体制に及ぼす一連の変化をポストナショナリズムの兆候として認識することができる。その兆候は、しばしば既存の秩序に対する暴力として現れることも事実だが、本研究では、アルジュン・アパデュライが『さまよえる近代』で表明したように、ポストナショナリズムの意義は、文化的自由が国民国家という画一的な存在を前提にしなくなる（Appadurai 1996: 23）可能性をもたらすことにあると考える。

ポストナショナリズムは少数／先住民族の文化に影響する。一方で、少数／先住民族の人びとが生存の機会を求めて難民や移民の形でグローバルな社会関係への参入を試みる場合、移動先で文化の変容や再構築を迫られることになる。他方で国内に留まり、経済発展の機会や政治的地位の向上を求める場合には、民族としての正統性を主張するために自文化の客体化や本質化が進む傾向が見られる。こうして同じ民族の間で、選択する生存手段に応じて、文化の異質性が増し、民族的アイデンティティに濃淡が生じてくると考えられる。このような人びとの文化を博物館はどう描けばよいのだろうか。

より具体的には、次のような問題が想定されるだろう。少数／先住民族の文化を展示する際に、典型的な文化（既存の学術研究やメディアで頻繁に表象される文化）を示すのか、変容中もしくは変容した文化を示すのか。彼ら／彼女らの民族的アイデンティティを本質的で強固なものとして示すのか、流動化あるいは多元化するものとして示すのか。少数／先住民族とのパートナーシップは重要だが、博物館はその人びとの政治的主張をどのように評価できるのか。そしてより根本的な問いは、少数／先住民族と国家との関係や、少数／先住民族を含む国民の文化、そしてその歴史的な形成過程をどのように展示するのかというものである。博物館が少数／先住民族に対して開かれた場となるためには、このような問題に対するポリシーを博物館側が主体的に準備しておくべきだろう。それこそが、ポストナショナリズム時代の博物館の大きな挑戦である。

博物館の取り組み

本研究で中心となるのは、上記の課題に対して、さまざまな形で博物館が取り組んでいる試みに着目し、その特色や効果を検討することである。ここではその例を紹介する。

筆者は、2014年から2018年にかけて科学研究費助成事業の新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」の一環としてラテンアメリカ諸国の博物館を訪問し、先住民文化展示の比較研究を試みた。その折、コロンビア国立博物館が2011年から2023年までの予定で取り組んでいる常設展の改修について知った。その目的は、複数の声からなる国民の表現を刷新し、さまざまな来館者へのコミュニケーションのあり方を更新することとされている。筆者の訪問した2017年の時点で公開されていたのが「資源としての土地」と「記憶と国民」という展示場である。前者の展示は、コロンビアの国土が、歴史的に誰によって住まわれ、征服され、利用され、描かれたかを伝えるものである。まず先スペイン期の先住民族のトウモロコシ栽培や狩猟採集活動に関する資料が展示され、続いて植民地時代以降の鉱山開発や、独立後の大規模農業や工業の発展などが紹介される。興味深いのは、豊かな農産物に恵まれた田園生活を描いた絵画と同時に、ゴム採集によって奴隷化された先住民族の写真も掲示され、国土の開発の多義性を示唆している点である。

鈴木 紀（すずき もとい）
国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授。専門は開発人類学、ラテンアメリカ文化論。共編著に『古代アメリカの比較文明論―メソアメリカとアンデスの過去から現在まで』（京都大学学術出版会2019年）がある。国立民族学博物館の特別展「ラテンアメリカの民衆芸術」（2023年3月9日−5月30日）のキュレーションを担当。

「多様性の壁」（2017年10月18日、コロンビア国立博物館、筆者撮影）

後者は、コロンビアの歴史を振り返り、文化の多元性を確認することを目的とする。導入部で先住民族ワユウの紛争調停のシンボルである杖が展示される。展示室正面の壁面は「多様性の壁」と名付けられ、さまざまな民族の姿を描いた絵画と写真が掲げられている。これらは独立以来暴力的な抗争が絶えなかった同国において国民和解が喫緊の課題であることに対応するものである。

移民をテーマとする展示として注目されるのは、イギリスのブラッドフォード市のカートライト・ホール美術館の試みである。同市は1960年代からインドやパキスタンなど南アジア系の移民が増加し、地元住民との緊張関係が高まった。シャロン・マクドナルド（Macdonald 2012）によれば、この美術館のキュレーションの原則は、さまざまな人びとの文化やアイデンティティの境界を固定化するのではなく、流動化させて扱うことである。たとえば「金と銀」という展覧会では、南アジア出身作家の金細工だけでなく、その影響をうけたイギリス人作家の作品を展示したり、金から着想して南アジアの持参金制度の是非を論じるコーナーをつくったりした。このように展示作品を選ぶ基準は、作品制作者の民族的背景だけでなく、作品のモノとしての属性から連想する「コネクション」が重要だという。これは従来のキュレーションの常識から大きく逸脱した試みであるといえる。

本研究では、このような博物館展示の新たな試みを幅広く情報収集し、その意義や効果についてポストナショナリズム概念を参照しながら、検討していきたい。

民博の展示ポリシー

本研究の成果として期待されるのは、民博の今後の展示の指針となる議論を提示することである。民博は、「国立民族学博物館における展示基本構想2007」（2007年）においてフォーラムとしての博物館という認識を表明し、展示の作り手としての研究者、展示の対象である文化に属する人びと、および来館者の3者間の対話の促進を宣言した。その後、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト（2014-2021年）を通じて、対話機能をもつデータベースの整備を行なった。本プロジェクトはこうした取り組みを踏まえ、展示を作る研究者自身がいかにフォーラムの場に臨むかを検討するものである。ポストナショナリズム時代にフォーラムとしての民博の機能を強化するために、これまでよりも踏み込んだ議論を目指したい。

引用文献

Appadurai, A. 1996 *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Macdonald, S. J. 2012 Museums, National, Postnational and Transnational Identities. In B. M. Carbonell (ed.) *Museum Studies: An Anthology of Contexts*, Second Edition, pp. 273-286. Chichester: Blackwell.